# 二樂叢書第一號を讀む

二樂叢書第一號は橘瑞超君の大旅行によつて齎らされたる佛教經典の中で、淨土教に關するものゝみを集錄したものである、其の中漢譯の分は之を現存のものと校べて綿密に異同を擧げ、ウイグール譯のものは其の文字を羅馬字に轉寫して發音を示し、下に邦語の解釋を施こし、且つ横には對比の爲に漢譯も添えてある。昨夜本願寺の堀賢雄師の手許から一本を送られ且つ批評する樣にとのことであつた、余は嘗て此の書の編者橘君の大探險の壯圖を聞いた時には、切に事なく其の目的を遂げられむことを希望し、半程君の辛勞によつて得られたる多くの發掘品の中、一部の分類に從事するの光榮に會し、近くは君の恙なき歸朝を迎へて親しく其の尊き旅行談を聞くことが出來た、相識ること僅かに一面ながら自分にとつては何だか舊い知己の樣な氣持ちがする、從がつて今此の書を手にして生じ來る感想は決して少々でない、此の書の爲に二度迄君は流沙崑崙を彷徨したではないか、水なく道なき不毛天險の地、もとより一命を賭けての仕事である、かくして集め來つた幾千の材料に一々目を通じて更に仔細の研究を加へ、今かく世に公やけにするに至つては、思ふに君の得意實に禁じ得られぬものがあるであらう、自分は此の點について深く君の心事を推察し此の册子に對して滿腔の敬意を表したい。さて書を繙いて見れば對校の結果は一々本文の側に擧げられてあつて、淨土教の研究者などにとつては絶好の資料と思はれるのであるが、余の如き門外